
リハビリテーション天草病院だより

2018年1月

No. 85



発行 埼玉県越谷市平方343-1 / (医) 敬愛会広報委員会

診療・介護報酬改定率決定について

医療法人敬愛会理事長 天草 大陸

昨年末、診療・介護報酬改定率が決定しました。これから、改定内容についての協議が始まります。今回の改定率決定に見られる「医療・介護費抑制策」の問題点を整理しました。

1) 民間病院や老人保健施設を含む介護事業者には、過去のマイナス改定のあおりを受けて、倒産や診療科の閉鎖に追い込まれる事例が多発している。このことは、患者や利用者の利便性にも大きな悪影響を及ぼしている。

2) この事態を回避するために、関係者は改定率の大幅なアップを国に要望してきた。当初、財務省は財政難を理由にマイナス改定を目論んだが、結局、現実を直視せざるを得なくなり下記の様なアップ率で決着した。

・診療報酬:医療職の件数費などに充てる「本体」部分の0.55%引き上げ=国費負担約600億円増。

・介護報酬:0.54%引き上げ=国費負担約150億円増。

3) 診療報酬改定について、日本医師会は「他の産業が賃上げを行う中、全就労者の11.9%を占める医療従事者への適切な手当を行い、アベノミクスから医療従事者が取り残されることがないようにしなければならない」と主張し、国費負担で1600億円、改定率で約1.4%に相当する財源を手当するよう求めていた。特に、民間病院の賃金の改定額は平成29年度では全産業中下位グループに属する。このことは、安倍首相が平成30年の労使交渉における3%の賃上げを求めていることと矛盾する。今回決定した600億円増では、賃金3%増には

程遠く、医療従事者の低所得が続くことになる。同様なことが介護従事者にも当てはまる。

4) 病院団体は猛反発している。「0.55%増の改定率では人件費の増加分に吸収されてしまい医療内容の充実等に回す余地は全くない」と強調。病院の支出は人件費だけではない。突然発生する高額な修繕費、CTやMRIなど何千万～何億円もする高額医療機器も10年前後で買い替えが必要。又、何十年ごとに何億～何十億円かけて建物を建て替えなくてはならない。その他諸々の支出が発生する。

5) 医療・介護費抑制にも限度かおる。消費税10%を確実に実施し、医療・介護報酬に振り向けるしかない。

6) もし医療・介護費抑制策が続くなら、病院などの支出はどんどん増え、逆に、収益は減り続け、行く先は、倒産ということになる。「病院崩壊」、「医療難民大量発生」などに陥ることは確実である。公的病院も現在は地元自治体などからの「補助金」で何とか経営を維持しているが、この「補助金」が高額になり過ぎ、自治体も支え切れなくなり公的病院までもが閉院してしまう事態も有り得ることである。「そうなるまではマスコミも国民も騒がず事態は悪化するばかりである」と憂える関係者も多い。

7) 「病院崩壊」「介護事業所崩壊」は絶対に阻止しなければならないが、崩壊が目前に迫っていることを、まずは、医療従事者、介護従事者自らが自覚し、政治的な運動をおこさなくてはならない。この運動なしに、「国民に自覚して欲しい」と促すのは的外れだ。

理学療法って何するの？

リハビリテーション部 副部長 理学療法士 佐藤 泰・塚田和也

《理学療法とは》

理学療法士は約50年前の昭和39年に「理学療法士及び作業療法士法」に基づき、産声をあげたリハビリの専門職です。

理学療法の定義は「病気、けが、加齢、障害などによって運動機能が低下した状態の人々に対し、運動機能の維持・改善を目的に、主としてその基本的動作能力の回復を図るため、治療体操その他の運動を行なわせ、及び電気刺激、マッサージ、温熱その他の物理的手段を加えることをいう」とされています。

《理学療法をめざすもの》

直接的な目的は「運動機能の維持・改善」にあります。また、「日常生活活動の改善」を図り、最終的には「生活の質の向上」をめざします。

我々は、生活をする中で病気、けが、加齢などの要因で起き上がる、座る、立ち上がる、歩くなどの動作が不自由になると、ひとりでトイレに行けなくなる、着替えができなくなる、食事が摂れなくなる、外出ができなくなるなどの不便が生じることがあります。しかし、誰もがこれらの動作をひとの手を借りず、行いたいと思うことは自然なことであり、理学療法では、そういった方々の、「自分らしく暮らしたい」という思いを大切にリハビリを行っています。

《理学療法の対象となる方》

主には、前述のような種々の要因により運動機能が低下した方々ですが、最近では高齢者の運動機能低下予防、メタボリックシンドローム予防、スポーツ分野でのパフォーマンス

向上など健康な人々にも広がっています。

当院の理学療法士が入院や外来で関わる疾患は主に脳卒中などの中枢神経疾患、脊髄や大腿骨の骨折による整形外科疾患です。また、市から委託を受け介護予防事業も展開し、地域の方々の健康増進にも関わりを強めています。

《当院での理学療法士の役割》

理学療法士は、「起き上がる、立つ、歩くなどの日常生活に不可欠な基本動作能力の獲得」を目指し、「個々の身体機能、動作や姿勢の分析から問題点を抽出」し、「現在の問題点改善や、今後起こり得る運動機能低下の予防のためのプログラム」を立て、「正しい動きとバランス、筋力と柔軟性の獲得に向けたリハビリ」を行い、皆様が自宅や地域で、生き甲斐を持って生活が送れるように、「住宅改修や福祉機器、装具、車椅子の適応をアドバイスし、社会参加をサポート」します。

これらを医師、看護師、介護士、栄養士、リハビリスタッフ（作業療法士、言語聴覚士）、相談室がそれぞれの専門性を発揮しながら、チームによるアプローチを実践しています。

当院は40年以上の歴史を持つリハビリ専門病院として培った経験や責務を自覚し、一人ひとりが担当する患者さん、ご家族が安心して、地域で生活できるよう、きめ細かな医療サービスを心掛けています。

今後も、お気軽にリハビリの見学にお越しいただき、ご相談などもお声掛け下さい。

「温かい母の手」

越谷市 荻津 久美子

その日、母と姉と私は1年振りにハイキングに出かけました。初夏の緑、展望台からの景色の美しさ。楽しい一日を父に報告しながら夕食を終えた直後、母は「ここが痛い」と胸をさすりながら、突然崩れるように意識朦朧になりました。父が必死で母の身体を支え救急車を呼びました。救急隊員の方の的確な判断のお陰で、獨協医科大学越谷病院の救命救急センターへ搬送されました。大動脈解離の命に係わる極めて危険な状態で緊急手術を受けました。奇跡的に一命は取り止めたものの、二度の開胸手術、更に追い討ちをかけるように脳梗塞も見つかりました。いくつもの傷の痛みと原因不明の吐き気や腹痛で食事も摂れずに痩せていき、記憶も曖昧な状態で母も私たち家族も先の見えない苦しい日々を過ごしました。

発症から45日後、リハビリテーション天草病院に転院して来ました。環境の変化に体調の悪さもあり、初めの一ヶ月はリハビリも辛い事もあるようでした。それでも、リハビリの先生方は不安でくじけそうになる母を優しく励まして下さり、体調も考慮しながら母の心と体を導いて下さいました。また、看護師さんや介護士さんは、いつでも明るく接して下さい、お仕事を終えて帰る時にも「また明日来るからね。夜はゆっくり休んでね。」と患者さん達に声をかけて下さる姿が心に残ります。皆さんの愛情あふれるプロとしての対応に母だけでなく私たち家族も助けて頂いています。一ヶ月経った頃、作業療法で書道を

やらせて頂きました。母は元々書道を習っていたので、以前に近いぐらいの字が書けたことで笑顔を見せ少し自分を取り戻したようでした。その後は、少しずつ食欲も出てきてゆっくりですが自分の足で歩けるまでに回復しました。また、天草病院では、高齢者の健康に欠かせない歯科治療も同時に受けられるので母も喜んでます。

ある日を境に突然、自分が自分でなくなってしまったような恐怖と絶望を乗り越えながら、細い体で頑張り続けてくれている母。今、温かい母の手に触れることが出来る喜びをかみしめお世話になった皆様に心から感謝いたします。（投稿日 平成29年10月5日）

「入院に寄せて」

春日部市 高野 孝次郎

脊椎圧迫骨折及び、脊柱管狭窄の手術後の回復期リハビリテーションのため、天草病院に転院。5月26日から9月30日の約4ヶ月間、お世話になりました。

私には、交通事故で頸椎損傷を負ったことによる、重度の身体障害がすでにあったため今回のケガや病気が体に及ぼす影響は、一般よりもずっと重く、そして深刻でした。過去の受傷時に、多くの運動機能はとうに失い、車椅子での生活を余儀なくされてはいたのですが、変調をきたしてからは、私の体の働きは更に低下。介助を得ても、ベッドから起き上がることさえままならなくなり、一人ではほとんど身動きが取れなくなっていました。「なんとしても、残されていた体の能力を取り戻したい」天草病院に、その強い願いを託したのです。

しかし、重い障害のある体の復活への道りは、自分自身が想像した以上に、はるかに

険しいものでした。先生方の懸命な取り組みにも拘わらず、私の体は遅々として順調に立て直しとは進みません。長くなる入院生活と比例するように遠くなる家庭復帰。心の中は苦しくなるばかりで、何度ひどく落ち込み、自暴自棄になったかわかりません。そんな私を初心に返らせたのは、私の再起を諦めず、不断の努力で支えてくださったリハビリの先生方でした。

リハビリは理学療法士、作業療法士それぞれに私を担当する先生がいらっしゃいました。が他にも大勢の先生方が私に関わり、励ましてくださいました。ある時は、先生が何人も集まり私の身体状況を見極め、対策を協議したり、またある時は、指導者でもある先生から、担当の先生に熱血指導があったり。一丸となり、まるで私の救出作戦を企てる陣のようです。その姿は随分と頼もしい限りで、諦めたなどと、口にすることも申し訳なく、そして恥ずかしく思うほど、真摯なものでした。

前向きになると、病棟のお世話になっている看護師さんや患者さんたちとも少しずつ打ち解け、雑談を交わすようになりました。味気ない入院生活に、会話という彩りを自ら添えることができたことを喜びながらも、同時に、看護師さんたちの労働環境について、考えさせられることも多くありました。特に入浴介助は、大変なご苦労に思えました。

病院では週に3回、入浴をさせてくれるのですが、私が入院していた夏の時期の浴場は、まさに蒸し風呂と化したような状態。お風呂担当の看護師さんは、その熱気の中、何時間も、細心の注意を払いながら大勢の患者さんの入浴の介助をしています。うだりながら、汗だくで懸命に患者さんを洗うその様子は、気の毒にさえ感じるほどでした。

冷房機を新たに設置し、患者さんの入浴環境、看護師さんの労働環境を整えてくださる

よう、天草病院には是非ともお願い申し上げます。また、長い入院生活は、どうしても手持無沙汰になりがちです。カラオケに誘って頂いたのですが残念ながら私にはその趣味がなく、お断りをしました。私の場合、パソコンで調べものをしたり、記事を読んだりするのが唯一の娯楽なのですが、病室にパソコンを持ち込むのは実際無理があります。せめてパソコン用のスペースを作ってもらえたらと入院中、同好の患者さんと何度か話をしていました。趣味が多様化し、また高価になる中、ニーズにいちいち答えるのは大変難しいとは重々承知しています。しかし、空いた時間を楽しめるような工夫をしてくださると、もっとリハビリに張り合いが持て、前向きに入院生活が過ごせるのではないかと思います。

現在はお陰様で、家庭復帰という目標を達成し、ゆっくりとした時間を楽しみながらも、更なる回復を目指し、リハビリの通院に励んでいます。これからもお力添えくださいますよう、どうぞよろしくお願い致します。

(投稿日 平成29年10月10日)

感謝の声 (投書箱より)

この病気になり辛い気持ちのままここに転院して来ましたが一緒に入院されている方々やスタッフの方たちが明るく元気で過ごされていて、毎日笑って良い時間を皆さんと過ごさせて頂きました。1人きりじゃない、みんなと一緒に頑張っていくんだという気持ちになれ大きな励みになりました。ここでの時間を大切に、これからも自分の体を大事にして同じような病気で一緒に頑張ってきた皆さんもこれからも元気でいてくださる事を願っています。

(C病棟 患者様より)

病院第1期建物が完成しました

リハビリテーション天草病院 事務長 大塚 尚行

現在、2期工程にて東側建物のリニューアル工事を進めております。平成29年6月に第1期建物が完成し、合わせて既存棟の改修工

事も実施しましたので、その主な箇所をご紹介します。なお、全工事は平成30年12月に完成予定となっております。



1階：外来・通所専用リハビリ室



1階：売店



1階：外来・通所専用言語療法室ゾーン



2・3・4各階：サブスタッフステーション



1階：相談コーナー（相談室）



3階：第2作業療法室

「身体拘束」と「虐待」はイコールではない

介護老人保健施設シルバーケア敬愛 副施設長 高橋 昌

平成12年の介護保険制度の施行時から、介護老人保健施設においては、入所者をベッドや車椅子に縛りつけるなど、身体を自由を奪う「身体拘束」は原則として禁止されています。他者からの不適切な扱いにより、生命・健康・生活が損なわれる状態に置かれる事は許されるものではなく、厚生労働省は「身体拘束」を「虐待」に該当する行為と考えています。ただし、「緊急やむを得ない場合」においては、「身体拘束」は例外的に「虐待」に該当しないと考えられています。

厚生労働省発行の「身体拘束ゼロへの手引き」によりますと、身体拘束の具体例として「徘徊や転落防止のため、車椅子やベッドに体や手足を縛る」「自分で降りられないように、ベッドを柵で囲む」「点滴や経管栄養のチューブを抜かないように、手足を縛る」などがあります。そして、「緊急やむを得ない場合」に該当する要件として、①切迫性＝生命や身体が危険にさらされる可能性が著しく高い場合、②非代替性＝代替する介護方法がないこと、③一時性＝一時的なものであること、の3つがすべて満たされる事が必要です。

このように規定されている中で、シルバーケア敬愛においては、「身体拘束廃止委員会」を月2回開催しており、多職種（医師・看護師・リハビリスタッフ、介護士、相談員）で対策を検討しています。

一方、「高齢者虐待」の定義としては、一般的に「暴行などの身体的虐待」、「介護を著しく怠るネグレクト」、「心理的虐待」、「性的虐

待」、「経済的虐待」などがありますが、シルバーケア敬愛において「身体的虐待」はありません。そして、すべての「身体拘束」を「虐待」と言われることに対しては、違和感を覚えています。

疾病等により、実際には立ったり歩いたりする事は出来ないにも拘わらず、認知症や高次脳機能障害のため自分は出来ると思込んでいる入所者に於いては、転倒・転落事故のリスクが高くなり、骨折に至る可能性が強く予測されます。そのため、車椅子用の安全ベルトを使用する事もありますが、その際には必ず多職種で話し合い、身体拘束に関する書類を作成し、家族の同意を得てから実施しています。そして介護士やリハビリスタッフが、安心・安全に過ごせる生活環境の調整を行います。その後は、定期的に心身状況を再評価して、拘束が外せる手段や期間を検討しています。しかし、車椅子用の安全ベルトをしているからこそ、車椅子を自分の力で動かし自由に行動出来る事をご本人も満足している場合であっても、「虐待」となるのでしょうか。

またその他に、「身体拘束」と「虐待」に関する研修会を、職員向けに年2回実施しています。この研修会を通じて、看護・介護・リハビリに関与するすべての職員が、正しい知識と技術を共有し自らの意識を高めて、実践に繋げられるよう努力しています。

今後も、「身体拘束廃止委員会」を中心として、施設内の「身体拘束ゼロ」と「虐待防止」を図ってゆきたいと思っています。

編 集 手 帳

＊新年明けましておめでとうございます。今年も当法人の緒活動に宜しくご指導のほどお願い申し上げます。昨年を振り返ると「最近チョット変よ」と思うことが多々あります。今年こそは何とかそれらを是正して欲しいと願う幾つかの出来事を取り上げました。

＊慰安婦問題を巡る2015年末の日韓合意の蒸し返し－日韓が双方で「最終的かつ不可逆的な解決」を確認し、韓国側は、ソウルの日本大使館前の少女像などの日本の懸念を認め、「適切に解決されるよう努力」することを約束したにもかかわらず、数週間前に「合意は朴前大統領が勝手に決めたこと、現政権は認めない」と言い出しました。「北朝鮮問題」で共同歩調を取らなければならない大事な時期に韓国が合意を守らず、再びゴールポストを動かそうとする事態は、今後、日韓関係が破綻に向かうことを示唆していると思います。

＊広島高裁、伊方原発運転差し止め決定の根拠は、約9万年前に起きたとされる130m離れた阿蘇山の巨大噴火－このニュースも去年の暮れ。将来のエネルギー対策を示す事なく「原発ゼロ」を党是とする一部の野党や一部

のメディアの尻馬に乗っての決定。産経新聞の産経抄は「運転差し止めを決めた裁判官は、左派メディアからヒーロー扱いされる。今回の決定を下した裁判長も晴れて仲間入りを果たした。2週間後に退官を迎えた後、どんな活躍をされるのか。なぜか、前川前文部科学事務次官の顔が目には浮かんだ」と述べています。全く同感です。

＊偏向報道が目立つ左派メディア－この代表格が朝日新聞。なぜか日本人をおとしめ自信を喪失させる記事が多いと感じます。「戦争絶対反対」は国民の思いであることは間違いありませんが、それにしても「空想的平和主義者」にくみし、常に左派勢力に寄り添う報道姿勢は異常です。戦時中に朝鮮半島で女性を強制連行したとする「虚偽報道」を繰り返し、後に「あれは謝りでした」と謝罪する醜さ、あってはならないことです。メディアの大きな役割として「権力の監視」が挙げられますが、根拠のない「偏向報道」は絶対に許されません。国民を惑わすだけです。「森友学園」や「加計学園」に係わる報道にも多くの人が「安倍首相降ろし」の捏造記事を含んでいると指摘しています。困ったものです。
(理事長 天草大陸)

表紙のことば

現在、通所リハビリの利用者様の登録は260名を超え、パワーリハビリも加わったため作品作製の時間が無くなりました。キューピーさんや牛乳パックの箱作り、唯一残っていた干支飾りの製作も新築棟建設に伴う引っ越しを機に廃止になり「もっと作りたい」「また、皆で一緒にやりたい」という古くからの利用者様の想いが取り残されてしまいました。

そこで今回、比較的人数に余裕があり製作を経験した利用者様が多い木曜日の空き時間を使って、今年の干支の犬の衝立を作製しました。麻痺のある方も多い中、和気あいあいと以前のように楽しくお喋りしながら作ることができました。作品は1階の通所リハビリ室に飾ってありますのでご覧ください。 (地域リハ担当看護師一同)